物語り論のゆくえ

廖　欽　彬

はじめに

野家啓一は『物語の哲学』（1996 年初版、2005 年増補版）において、近代や近代の価値観ないしそこから作り出された大きな歴史に対して反旗を翻した柳田国男の民俗学に培われた物語論とデリダやリクール、ベンヤミン、ダントーなどの物語論とを引き合いに出したうえで、自らの独特な物語り論を提起した。彼によれば、ものがたりには物語（名詞、story）と物語り（動詞、narrative）との区別、また「実体概念」と「機能概念」との区別があり、前者は静的なものであり、ストーリーであり、後者は動的なものであり、物語行為であるという。[1]彼がより重んずるのは、後者であり、歴史的事実を語る言語的制作（ポイエーシス）という行為である。

野家の考察では、大きな歴史の叙述は冷戦が終結した後、もはや顧みられるのに値しないものとなり、代わりに現れたのはポストモダニズムがもたらした小さな物語の叙述である。むろん、彼はすでに完結した静的な物語を目指すのではなく、むしろ、未完の動的な物語を目指しているのである。

動詞としての物語りのほか、われわれは、野家の物語り論は人間の歴史を紡ぐ方法論的措置として提起されたものであるため、いくつかの定義を付与されていることに注目すべきである。その物語り論には、始まり（起源）もなければ終わり（テロス）もなく、特定した単数ではなく、特定できない複数の語り手と聞き手が必要であり、そして物語外部のものの参与が必要なのである。それは、たとえば直接的経験、異他的なるもの、偶然的なもの、理解不可能なもの、出来事として分節化されてはならないもの、物語りの内部に組み込まれていないものなど

[1] 野家啓一『物語の哲学』、岩波書店、2005 年増補版、299-300 頁を参照。

として説明されている。[2]いうまでもなく、これらの条件は、未完の動的な物語を主張するのに必要不可欠なものなのである。

ようするに、フランシス・フクヤマが主張した「歴史の終焉」がもたらした二つのメッセージ、つまりアメリカの新自由主義への賛美とポスト歴史が意味する「物語の復権」というメッセージに直面して、野家は前者のほうにではなく、後者のほうに自らの陣営を敷いたのである。歴史の後に現れるのは物語であるという意味で、物語るという行為によって提起された物語は、人間の新たな歴史としてみなされるべきであろう。

一、大森荘蔵の影響とその顛倒

大森荘蔵は初期ヴィトゲンシュタインの言語論から出発して、「経験は真実なり」という命題を唱えつつ、自らの初期言語論の基盤を固めたのは、周知の通りである。後期に入ると、私的言語の空間から離脱しようと考えるようになった彼はクワインのホーリズムを借用しつつ、全盲の子供のコミュニケーション記録を生かして、経験を表す言語（名詞）を介しての人間関係論、つまり自他論の言語領域に入った。このとき、言語は私的言語ではなく共同体的、公的言語となり、独我論的な言語論はもはや一人の言語論ではなく共同体、全体の言語論となったのである。このような個人から団体、共同体へと変わる言語論の変化はまた個人の時間から共同体の時間へと変わる彼の時間論の変化を指し示すことになる。[3]大森の共同体、全体の言語論は類比（Analogy）や行動主義（Behaviorismus）における相互理解やコミュニケーションを退け、「文脈的な了解」（野家の言葉でいうとコンテクストでの了解）をその成立の根拠とした。ここでいう「文脈的な了解」とは、直接的な体験での了解ではなく、他の無数の命題との関係によって形成されたネットワークでの文脈的な了解である。簡潔に言えば、それは命題群のネットワー

[2] 前掲書、323 頁を参照。
[3] 拙稿「田辺元の歴史哲学――大森荘蔵の時間論との比較」『立命館大学人文科学研究所紀要』第 113 巻、2018 年、99-121 頁を参照されたい。

クによるものである。

われわれはここに大森の上述した言語論（静的なもの）をモデルにした野家の言語行為を介しての物語り論（動的なもの）を見出すことができる。野家によれば、歴史的事実（過去の出来事）が物語、ストーリーあるいは歴史になるためには、因果関係のコンテクストを条件としなければならない。つまり、単独の出来事、一つの歴史的事実は意味をなさず、物語、ストーリー、歴史にはならないのである。物語、ストーリー、歴史になるためには、二つないしその以上の事実の因果的配列によってでなければならない。このように見てくると、大森の「文脈的な了解」と野家の「コンテクストでの了解」の影響関係が明らかである。したがって、「歴史のナラトロジー」というより、「哲学のナラトロジー」（philosophical narratology）の面貌が現れているような気がしてならない。

このような「哲学のナラトロジー」の顔はさまざまな批判を招くことになり、野家はそれらの批判に対して、自らの立場を釈明・弁明していた。その一つの例を取り上げて、野家が大森の開けた哲学的態度を顛倒させるに至ったことを少し考えてみたい。

『物語の哲学』の「増補新版へのあとがき」にある「ないものねだり」とされる高橋哲哉の批判では、柳田国男の物語論を出発点とした野家の物語り論は戦前保守派の性格あるいは一種の軍国主義臭を帯びており、政治性や倫理性を欠いているという意味で、一種の時代錯誤であるとされる。それに対して、野家は自らの物語り論は右派や左派の問題に関係なく、より普遍的な思想の可能性を掘り出して、時代に対応できるようなものであるとし、政治性や倫理性を念頭に置かない物語り論（一種のメタ理論）にそれらのものを強要しようがないと応答した。野家のこの哲学的動機はまさに「哲学のナラトロジー」の立場に符合する。

高橋の批判に応答する代わりにそれを退けた野家の物語り論には、その時点において更なる発展の可能性を示していないように思われる。[4]ここで考えてみたい

[4] たとえば野家が「歴史を書くという行為――その論理と倫理」（『岩波講座哲学 11　歴史／物語の哲学』、岩波書店、2009 年、1-16 頁）において語った「歴史の世代間倫理」も実際彼

のは、物語りを哲学的に構築しようとした野家はそれを一つの方法論的措置として措定した以上、方法を廃棄した後の方法、つまり非方法の方法、「綻び＝芽生え」を帯びる方法を考えるように至ることが困難である、ということである。物語は起源もなくテロスもない立場からの「物語る」のみならず、また不特定の語り手と聞き手による物語行為、制作的行為（ポイエーシス）も必要であり、完成を目指さない未完のものであるとされている。にもかかわらず、物語り論（一種の歴史に関する方法論）自体について、あたかも完成したもの、もはや変化することがないもののように説明されているように思われる。

これに対して、大森は初期の私的言語論を共同体の言語論へと、また個人の時間論を共同体の時間論へと変貌させた。ある意味では、彼は初期の完結した言語論に、「綻び」を与えること、あるいは挑戦を迎えることによって、新たな理論の「芽生え」をきたそうとした。私はこのような観点から、野家が大森の開けた哲学的態度を顛倒させるに至ったことを見た。同じ無数の命題における「文脈的な了解」から出発した二人の「言語論」の違いはここに浮上してくるのである。

二、「歴史の終焉」を承けて

既述のように、ヘーゲル・コジェーヴ・フクヤマの思想的系譜から出た「歴史の終焉」は野家の物語り論を通過して、「物語の復権」や「未完の歴史」の局面を迎えている。ポスト歴史の後に来るのは、ノスタルジーや懐古主義、あるいは虚無主義の再来を意味するものではなく、過去を変え未来を迎えるための物語りである。しかし、現在において人類の過去と未来を背負う物語り論は単に言語哲学や解釈学の領域、あるいは一つの固定した方法論に止まっているだけならば、果たしていかなる現実的な、現代的な意義をもたらすことができるのか。

たとえば、柄谷行人はフクヤマのいう「歴史の終焉」が意味するアメリカの新自由主義の勝利に否定的な態度を取り、それによる「国家・民族・資本」という

自身の物語り論の枠組みから出ていない。

社会構成体の解体に躍起になっている（『世界史の構造』）。彼はこのような構成体を B、C の構成体とし、「力と交換様式」という観点で人類の歴史の流れからその構造を描いた。それに対して、彼は同様に人類の歴史の流れから U ないし A、D の構成体を構想することによって、「国家・民族・資本」という社会構成体を克服しようとして、自らの交換様式論を打ち立てた（『力と交換様式』）。ここに、原始遊動社会や氏族社会（U や A）にしか出てこないもの（物語）を活用することによって、人類を B、C の構成体から解放させようとし、その歴史を再構築しようとする柄谷の意欲を見出すことができる。この点から、野家と柄谷はある意味では似たような立場に立っているように見える。[5]

野家の物語り論は、むろん、人間を近代（柄谷のいう BC の構成体）の支配や束縛から解放させるという意図を持っていないわけではないが（別言すれば、高橋が指摘したように全く政治性、倫理性がないわけではないが）、解放というより、むしろ論理の構築に力を注いでいる側面が強いように思われる。この物語り論の構築は極力に大きな歴史を避け、それに覆われている小さな歴史や物語、あるいは高坂正顕がいう歴史の周辺現象に属する噂話、逸話、伝承、コンベンション、流行、慣習（『歴史の世界』）を新たに提示することにかかわっている。この辺りでは、野家と柄谷はだいぶ違う立場に立っている。それでは、ランケの影響を受けた京都学派流（西田幾多郎・高坂）の歴史観である「永遠の今」は「物語りは永遠につながる」に関係しているのかと言えば、決してそうではない。なぜなら、野家の物語り論は宗教とは全く無縁であり、身近な経験を言葉（言語）行為によって構築されたものだからである。それはおそらく「宗教のナラトロジー」とは全く無関係であろう。のちに、野家は自らの物語り論を踏まえて、「科学のナラトロジー」を展開し、鷲田清一や木村敏とともに臨床哲学の領域に入っているのは周知の通りである。

ともあれ、われわれはここに同じ「歴史の終焉」を承けた思想家として登場してきた柄谷と野家の異なる立場を看取することができよう。マルクス・エンゲル

[5] たとえば、柄谷の『遊動論――柳国男と山人』（文藝春秋、2014 年）はそのような消息を伝えている。

スの徒である柄谷が「歴史の終焉」の代わりに、「DはUないしAの高次元での回復である」と主張し「歴史の螺旋状的反復」を強調している。それに対して、野家は自らの関心点をさらに「国家・民族・資本」、あるいは宗教や超越的な形而上学に向けずに、ほかの領域に移した。「臨床心理学、社会学、看護学、医学、教育学などの諸領域において、人間科学の方法論ないしは文化の基礎理論として多用な展開を見せている」[6]彼の物語り論は社会現場における具体的な試行に力点を置くようになり、その方法論としての普遍的価値を試すことになっている。この点から見ると、元来、物語やストーリー、歴史の反復を繰り返すはずの野家の物語り論は一つの正しい方法論的措置という安全な地帯に住み着くことになっているように思われる。

一方、日本における「歴史の終焉」をめぐる議論とは違って、独自の歴史的論述を展開している現代中国の思想家として仰がれている趙汀陽は北京大学人文科学研究院の講演会「文明的起源与存在論事件」（2023 年 3 月 3 日）で、「存在論的事件」にかかわる歴史観を提起している。彼によれば、フクヤマが主張した「歴史の終焉」は必然的に乗り越えられるようになり、歴史は新自由主義の歴史観に終わるはずはないという。しかし、その依拠とするところは、柄谷や野家のいうような小さな物語（柄谷のいうUやA)、あるいは野家のいう直接的経験、異他的なるもの、偶然的なもの、理解不可能なもの、出来事として分節化されてはならないもの、物語りの内部に組み込まれていないものではなく、人類の生活世界にとてつもない衝撃や変化を与えた、作為による歴史的事件が紡ぎ出す大きな、合理的な歴史の叙述である。彼から見れば、人類の歴史の成立根拠は人類のすべての合理的思惟や知識による産物に由来する。これらの産物として彼が取り上げたのは言葉（言語)、生産技術、論理と数学、制度、科学である。つまり、人類の歴史はこれらのものの誕生によってはじめて可能となったのである。[7]

むろん、このような主張はわれわれには一種の時代錯誤の印象を与えてもくれている。しかし、現代中国の歴史観、世界観ないし価値観から見れば、それは決

[6] 野家啓一『物語の哲学』、301 頁。
[7] 趙汀陽「存在論事件――一種歴史観」、『中国社会科学報』2022 年 8 月 1 日を参照。

して根拠のない夢話ではなく、彼らにとってむしろ重要なものであり真実なのである。すべての歴史的叙述はこのようにシステム化されることによって、大きな（天下）体系に組み込まれていくのである。これはまさに彼らの過去・現在・未来における理想的な歴史の姿にほかならない。

三、改めて物語り論に戻る

今日の日本哲学ワークショップは「物語り論の今」というテーマを掲げた以上、今と物語りとの、あるいは今と物語を語ることとの関係を考える必要があるのであろう。上述のように、今の東アジアにおいて、「歴史の終焉」の後に現れてきたのは、新たに構築される物語（小さな歴史）と大きな歴史である。趙汀陽が提起した後者は決して前者を通過してから出現したものではなく、むしろ徹底的に前者を退けて、近代欧米とは異なる近代のモデルを提起するために構築された論理的装置であると思われる。

それに対して、野家が提起した物語り論はもはや一つの正しい方法論的措置という安全な地帯に住み着く必要はなく、細微なものに注意を払いながらも敢えて大きな歴史の構想に邁進すべきであると思う。なぜなら、野家自身のいうように、歴史の成立する要件は歴史的事実の因果的配列によるコンテクストでの了解だからである。歴史は物語るという言語行為を通して個人の歴史や共同体の歴史でもありうるし、また、一国内や多国間の歴史でもありうるため、特にポストモダン的に自己を堅持する必要はないのであろう。大森が主張した「文脈的な了解」を類比的に歴史哲学の構築に活用して、越境してくる異他的なものとの遭遇によって物語を語り直し、時代錯誤の誹りを背負いつつも「私」的な歴史の叙述を「公」的な歴史の叙述にするのは、物語り論の今日における任務であり、これからのゆくえでもあるように思われる。

（りょう　きんひん
中山大学哲学系教授）